

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	追悼特集
タイトル	大野精一先生の理論と実践
Title	
著者	山脇 直司
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 37-39
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000290/

追悼特集

大野精一先生の理論と実践

山脇 直司^a

(星槎大学共生科学部)

昨年10月4日、大野先生から突然のメールで、体調が悪く病院で検査を受けたところ、ステージIVの膵臓がんで転移もみられると診断されたことを知らされた。その時の私のショックは非常に大きかったが、何とか12月に行われる大学院教育実践研究科(専門職大学院)の機関別認証評価受審日まではがんばって頂き、有終の美を飾って頂きたいと祈る気持ちでいた。しかしその願いも空しく、それから半月しか経たない10月21日に先生は旅立たれてしまった。12月の面談での認証評価委員からは「専門職大学院でありながら、教職大学院ではない独自の在り方」だと高く評価されただけに、先生にその声を直接聴いて頂きたかったという思いで一杯である。

大野先生(以下では、先生と略記)と私は、今まで生きてきたバックグラウンドが全く異なるとはいえ、学内で度々お話しする時、妙に気が合っていた。改めてその理由を考えると、先生が社会を捉える思考の枠組みとしての「理論(セオリー=ギリシャ語で観照を意味するテオレインに由来することば)」と、私の社会理論が大きく重なっていたからだと思う。都立高校教員として35年にもわたり社会科・生活指導・教育相談という「実践」を担当した先生が大学院で研究されたのは、マルクス経済学であった。もちろん先生は、その研究を通してマルクス主義になったわけではない。察するところ、先生はその研究を通して「社会を批判的に捉える視点」「貧困層や社会的弱者の現状を重視する視点」を培われたのだと思う。もとより「社会を中立的に観察する視点」などあり得ない(幻想である)。そして社会認識は、社会を認識する主体の自己言及を含まなければならない(当事者と非当事者の問題など)。

私には、先生の長きにわたる教員生活の中で、「自己」と幼児や子どもを含む「他者」を、社会的存在者や社会的関係性という視点を取り入れながら理解し、面前の課題と取り組む姿が思い浮かぶ。私が先生より直接頂いた「月刊学校相談」に1994年4月から2006年3月まで連載された時評集は、そうした先生の中の理論と実践の統合が見事に表されている。そこで特に、印象に残ったのは「社会全体を把握しようとしめない心理学の横行」を先生が嘆かれていたことである。そしてそうした嘆きは、先生の絶筆となった大野

^a 星槎大学共生科学部教授・学長

(2021)にも如実に表れている。

この絶筆は、「政治研究的実践者と実践的研究者という2区分類型から両方の特性を含み込んだ(統合した)大学院教育での専門職者養成こそ重要であり、一冊の本の「書評」を通してこの課題に答えようとする一つの試論(私論)」という意図のもとに書かれ、一冊の書評という形式をとりながら、先生ご自身の学問論と社会理論が明晰に語られている。その中で、私がこの論文で注目したい箇所を、長くはなるが引用しよう。

「この中で(教育心理学会での活動の中で)、私の認識(理解)ばかりでなく一般に、心理学は社会科学の一分野であるはずなのに、一体これはどのようなことなのかと驚愕・逡巡せざるをえない体験をした。すべてがそうではないし、実践論文を取り入れようとしていたのではあるが、基本的にその主流は **Science** (自然科学) と統計的検定で溢れていた。研究は「科学的」でなければならない。これは当然のことである。しかしだからといって「自然科学 **science**」的である必要性も必然性もない。30年以上、経済学(社会科学)から離れてわかったのは、社会科学固有の研究手法や研究倫理の在り方等についてキチンとした議論が行われてこなかののではないか、このままでは日本における人文科学、社会科学、自然科学における真の「科学」研究(現在は自然科学に偏ったものになっていないかどうか)に大きな問題が生じていないか、ということである。野村・社会科学の考え方はこうした事態に対して根本的な考察を加え、一つの解決の道筋を示したもの、というのが筆者の評価である。」(大野, 2021, p.4)

「社会科学の分野で研究する際には、自分がどのように人間社会を認識しているか、また認識できていると考えているかを問い直し、他者との違いについて理解する必要がある。自然科学の分野であれば、誰がどう見ても同じ物事を客観的に認識し、理解できると考えても良いのかもしれないが、社会科学ではそうはいかない。この課題は通常、存在論(ontology)と認識論(epistemology)という言葉で整理されている」(大野, 2021, p.10)。厄介であっても社会科学の考え方を把握するためにはここから出発する以外にない。」(大野, 2021, p.5)

「——3つの認識論を完結に次にまとめる。(1) 実証主義——自然と人間社会を同じように捉え、自然科学と同じようなアプローチで人間社会を認識できるという立場(大野, 2021, p.16) (2) 解釈主義——世の中の出来事や社会現象は我々の知識と独立に存在しているわけではなく、むしろ私たちがどのように解釈しているかが決定的に重要であり、その違いや在り方が「政治的・社会的結果に影響を与えるため、言説や文脈を重視して各主体がどの解釈しているか」を把握することが社会諸学(社会科学)の要諦である(大野, 2021, p.20)。(3) 批判的实在論——世の中は私たちの知識とは独立して存在するが(実証主義と同じ)、重要なのは目に見える事象ではなく、その背後に持続的に存在する構造(階級やジェンダー、人種 **race** など)である(実証主義と異なる)。残念ながら日本の社会科学はこうしたリサーチトレーニングを欠いたまま、結果的に自然科学のリサーチ・デザインやリサーチ・メソッドに擦り寄ってしまったものと思われる。なお、私の立場は批判的实在論であり、今後教育実践に関する研究(共同研究)があれば、リサーチ・デザインとして「事例研究」を、リサーチ・メソッドとしてインタビュー(聞き取り調査)を中心にしながら、エスノ

グラフィー／参与観察を実施し、そして結果のまとめとして言説分析を行いたいと現在考えているところである。」(大野, 2021, p.6)

こうした決意の下に、ご自身に課せられた最後の仕事に取り掛かる間もなく、旅立たれた先生の無念の思いを、私は痛切に感じざるを得ない。本学の専門職大学院は、こうした先生の思いをぜひ引き継ぎながら発展して行ってほしいと思う。

私としてできることは、公共哲学・実践哲学の観点から、今盛んに議論されている「エイジェンシー」という概念を「社会的関係性の中で責任をもって行為する主体」と理解しつつ、また、現代の心理学がどのような歴史的経緯で生まれたのかという問題を踏まえながら、戦後教育界で大きな影響力を持った知能指数などの歪んだ概念を徹底的に批判・解体して、星槎大学にふさわしい教育概念を再興する作業を、Danzinger (1997, 河野監訳 2005) などの書物に依拠しつつ、実践していきたいと思う所存である。

引用文献

Danzinger, K.(1997). *Naming the mind: How psychology found its language*. Sage Publication: London (ダンジンガー, K. 河野哲也 (監訳) (2005) 心を名づけること——心理学の社会的構成 勁草書房)

大野 精一(2021). 教育実践研究とは何か：野村康著『社会科学の考え方ー認識論、リサーチデザイン、手法』を手がかりにー星槎大学大学院紀要,3(1), 1-8.